

書評

目黒泰一郎 編

左アプローチによる TRI

小倉記念病院長

延 吉 正 清

冠動脈インターベンションを世界で最初に行ったのは Gruentzig である。彼は、1977年にスイスのチューリッヒで右股動脈穿刺に細いカテーテルを用い、前下行枝の高度狭窄の拡張に成功した。そしてこの手技を、Percutaneous Transluminal Coronary Angioplasty, すなわち PTCA と命名した。

その後、ステントやロータブレーター、DCA などの出現により PTCA を PCI (Percutaneous Coronary Intervention) と呼ぶようになった。歴史的には股動脈穿刺の後、Stertz らにより右前腕穿刺で行う PTCA も普及した。

1992年8月14日、アムステルダム の Kiemeneij (Kimney) によって初めて経橈骨動脈冠動脈インターベンションが行われた。当時、Campeau により経橈骨動脈

冠動脈造影 (TRA) が紹介され、さらに 1990 年代初めにステント植え込みは十分な後拡張なしで行われていたため、ステント血栓症を防ぐ強力な抗凝固療法が必要であった。そこで、出血の合併症を減少させるために工夫されたのが TRI なのである。

わが国においても、齋藤滋先生が右経橈骨動脈よりの TRI を普及させておられるが、左アプローチによる TRI は目黒泰一郎先生によって初めて行われたのである。当時左からのアプローチは一般的ではなかったが、目黒先生を中心とするグループがカテーテルシース、圧迫帯などを研究し、現在では radial approach は左経橈骨動脈からになってきている。

目黒先生編集の『左アプローチによる TRI』には、何千例と行われた症例の結果が平易にまとめ

られている。

まずは、なぜ左アプローチなのかに始まり、左アプローチに必要なデバイス、穿刺法、ガイディングカテーテルの選択や操作のコツ、ご自分達で開発されたシースレスガイディングカテーテルの使い方、DCA やロータブレーターの場合の使用方法とコツ、複雑病変に対する PCI や急性心筋梗塞に対する左アプローチの考察、合併症とその対策など、手技のすべてについて非常に詳細に、しかも初心者が気をつけなければならない点をも含めて書かれている。例えば、左経橈骨動脈の TRI では、カテーテル操作時に右手が遠くなるが、特別なアームレストを使用されており、術者と左経橈骨穿刺部位が離れない工夫をされておられる。このような目黒グループの独特な工夫は、他の追随を許さない一流の仕事であると考える。

PCI を行う初心者の方にはぜひともお薦めしたい 1 冊である。

〔B5 頁 120 2006 年 定価 5,250 円(本体 5,000 円+税 5%) 医学書院刊〕